絵本の読み聞かせにおける感情表現の日米比較

尾崎　萌子　（慶應義塾大学大学院生）

1.　研究背景と目的

絵本の読み聞かせとと子どもの識字，読解力，言語発達の関連については広範な研究が行われている((Blewitt et al., 2009; Hindman et al., 2013; Ninio, 1983)．さらに，親が絵本を読み聞かせる際に登場人物の感情に触れる言語表現が，子どもの感情理解や共感能力と関連しているとの研究結果が報告されている(Aram & Aviram, 2009)．

しかし，絵本の読み聞かせ中に親が感情に言及することに関する研究はまだ限られており，そのうち言語や文化の違いに関する対照研究はほとんど存在しない．このリサーチギャップを埋めるべく，本研究はアメリカ人の親子 22 組と日本人の親子 20 組を対象に，3 才から 7 才の子どもに文字無しの絵本である *Found.* (Newman & Day, 2018) を読み聞かせる様子をビデオで記録し，親が登場人物の感情をどのように表現しているかについて混合分析を行った．

1.　分析方法

本研究は博士論文のために収集中のデータの一部を抜粋して分析している．コーパスとしては現時点で日本人 183 組，アメリカ人 74 組のデータがあるが，今回はそのうち日本人 20 組，アメリカ人 22 組を対象としている．被験者の年齢による内訳は表 1 のとおりである．

表１　データの本数と子供の年齢別内訳

	親の動画数	親子の動画数	子供の年齢	子供の性別
日本人	20	20	３歳：２人　４歳：７人　５歳：４人　６歳：３人 ７歳：４人　　μ：5;4	F:　11 人 M:　9 人
アメリカ人	22	26	３歳：５人　４歳：６人　５歳：５人　６歳：６人 ７歳：４人　　μ：5;3	F:　13 人 M:　13 人

被験者は日本語もしくはアメリカ英語が母語であり，3-7 歳の子供がいる日本人もしくはアメリカ人の家庭であった．子供が日本人とアメリカ人のハーフの場合には，居住地および読み聞かせをしている親の言語・国籍をもとにどちらの言語のデータとして扱うかを判断した．被験者は SNS を用いた拡散と友人や幼稚園への声かけなどによる雪だるま方式を併用した．本研究は事前に慶應義塾大学の倫理委員会の承認を受けており（受理番号 23026），承認された研究実施方法に則って被験者に事前に同意書の記入を依頼し，研究参加への同意が得られた上で絵本を被験者の自宅に 1 部ずつ郵送した．

郵送した絵本は *Found.* (Newman & Day, 2018) という文字無し絵本である．内容としては，雨の中で迷子犬を見つけた少女が自宅に犬を連れて帰り世話をする中で，次第に愛着を持つようになる．しかし，実はこの犬は飼い犬だったことがわかり，葛藤の末に少女は元の飼い主に犬を返すことにする．少女は肩を落としながら帰路につくが，途中でアニマルシェルターの横を通った際にショーウィンドウの向こうにいたブルドッグと心が通じ，飼うことにするという物語である．この絵本を選定した理由としては，3-7 歳まで対応できそうな内容であることと，登場人物の感情の描写が豊富であることが主である．

被験者に出された指示は次のとおりである：(1) まずは親が一人で一通り読み，内容を把握する (2) 次に，*Found.* を一度も読んだことのない大人に内容を教えるかのように，親が一人で絵本の朗読を行っているところを録画する．この時，読んでいる内容が子供に聞かれないようにする (3) その後，同じ絵本を子供に読み聞かせる (4) Google Forms から事後アンケートに回答する (5) 動画を研究代表者（尾崎萌子）にメールにて送付する．その他の追加の指示としては，可能な限り顔出しをお願いしたいが，抵抗がある場合には背後からの動画でも可能であること，対象の子供が複数人いる場合には一人一人と個別に動画を撮っていただきたいことを伝えた．なるべく日常的に行なっている自然な読み聞かせの様子に近づけるために，読み聞かせ方法やカメラのアングルに関しては自由とした．

事後アンケートでは読み手の家庭における役割（父・母など）年齢・学歴・ニューロダイバージェンス・海外居住歴，子供の使用言語・年齢・性別・ニューロダイバージェンス・読み聞かせ頻度を聞き，その上で，*Found.* を読むのは今回が初めてかどうか，通常の読み聞かせと異なる点，録画による障害の有無を質問した．

集めた動画データはその後全て素起こしして，MaxQDA という混合分析ソフトウェアを用いてコード付けを行なった．コードに関しては(Ekman, 1992)の基本感情とされる，怒り，恐れ，悲しみ，嫌悪，驚き，軽蔑，喜びに加え，社会的感情とされる思いやりを足した８つのコードを使用した．このうち，物語の内容の関係で嫌悪・驚き・軽蔑に関する発話はなかった．また思いやりに関しては愛情と哀れみに分けて，愛情は「愛する（'love'）」「好き（'like'）」に加え，「よしよしする（'pat'）」や「大事そうに抱っこする（'hug, ' 'cuddle'）」といった愛情表現も含めた．憐れみに関しては 「かわいそう（'poor X'）」「ひとりぼっち（'lonely'）」の他，「恋しく思う（'miss'）」も含めた．よって，実際に使用したコードとしては，怒り・恐れ・悲しみ・喜びの４つの基本感情と愛情・哀れみの２つの社会的感情である．

2. 結果

はじめに，絵本を親が子に読み聞かせる際に，親がどの程度感情表現を用いるかを日米で比較した．図１はアメリカ人被験者の感情表現の使用頻度を子供の年齢に応じてプロットした散布図であり，図２は日本人被験者の散布図である．どちらも縦軸が頻度，横軸が子供の年齢である．比較すると，総じてアメリカ人の方が日本人よりも感情への言及が多いことがわかった．また，アメリカ人の方のデータは５歳を中心としたベル型曲線のように弓形になっており，３歳から５歳にかけて親の感情表現の使用頻度が伸びているものの，５歳以降は緩やかに減少していることがわかった．一方で，日本人の方は同じく３歳から４歳にかけて感情表現の使用頻度が上がるものの，４歳の後半からは右肩下がりで使用頻度が下がった．

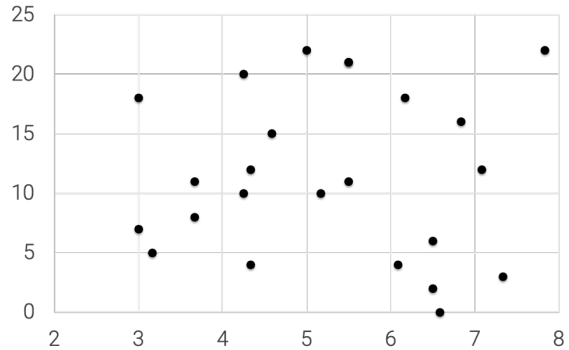

図１ アメリカ人被験者による感情への言及頻度
（親子での読み聞かせ中の親の発話）

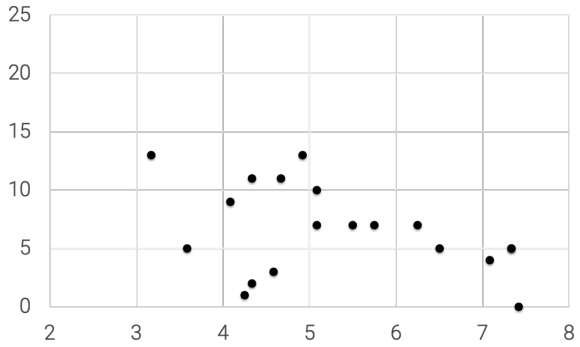

図２ 日本人被験者による感情への言及頻度
（親子での読み聞かせ中の親の発話）

実際の発話内容で見比べても，アメリカ人の方が日本人よりもより積極的に感情表現を用いていると言える．例１と例２はどちらも７歳４ヶ月の子供との読み聞かせであり，どちらも少女が犬を元の飼い主に返す場面での発話である．例１では親がまず子供に，犬を返すという判断が正しい選択かどうかを問い（1 行目），その上でその場面の登場人物である少女(5 行目)と少年（飼い主）(3 行目)，さらに子供自身(7 行目)がどういう感情かを順番に質問している．一方で，例２の日本人親子は，少女が寂しそうということ以外は特に言及せず，感情表現の使用がアメリカ人と比べると少ないことがわかる．

例１ アメリカ人親子の読み聞かせ（子の年齢=7;4）

1 MOT: Do you think that's the right decision?
2 CHI: Yeah.
3 MOT: Yeah? <u>How does that make the boy feel?</u>
4 CHI: Happy.
5 MOT: <u>How does it make her feel?</u>
6 CHI: Sad.
7 MOT: <u>How do you feel?</u>
8 CHI: Um, both, kinda.

例2 日本人親子の読み聞かせ(子の年齢=7;4)
1　MOT: 帰しに行くことにしました．トントン．あ，ロスコーちゃん．しっぽふりふりしてる．さみしそうだね．女の子．

次に，親が単独で絵本を朗読している時と，子供に絵本を読み聞かせている時で感情表現の使用頻度に差があるかを分析した．図 3 と図 4 は親子での読み聞かせと単独での朗読の際の感情表現への言及の頻度をそれぞれ箱ヒゲ図にしたものである．アメリカ人被験者は単独朗読の際の感情表現の使用が親子で読み聞かせる際に比べて有意に低かった．対して，日本人被験者は親子での読み聞かせの際と単独朗読とでは感情表現の使用頻度に差がほとんどなかった．アメリカ人の頻度差については，発話内容の内訳を見ると親子での読み聞かせの際の方が悲しみ（単独：2.59 親子：5.19）と喜び（単独:1.59　親子:3.58）といった基本感情への言及が多くなることがわかった．一方で，日本人については単独朗読と比較して親子での読み聞かせ時の方がやや悲しみへの言及が多かったが（単独：1.60 親子：2.10），喜びに関しては変化がなかった（単独：1.30　親子: 1.30）．

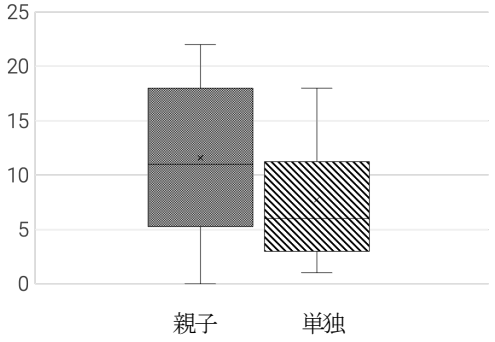

図3 アメリカ人被験者による感情への言及の頻度
(親子での読み聞かせ中と単独朗読の親の発話の比較)

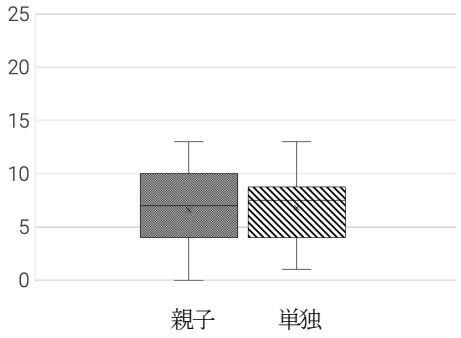

図4 日本人被験者による感情への言及の頻度
親子での読み聞かせ中と単独朗読の親の発話の比較)

アメリカ人の基本感情への言及に関して実際の発話で見てみる．例3-1 は親の単独朗読の抜粋であり，例3-2 は同じ親による親子での読み聞かせ時の同じ場面の発話である．単独朗読の際には犬が少年の顔を舐めることで喜びを表している様子，再会に喜ぶ少年，それを見つめる悲しそうな少女が包括的かつ端的に表現されているが（例 3-1 の下線部），例 3-2 ではこれを噛み砕いて，1 行目でまず状況の整理と確認を行い，7 行目と 9 行目で少女の感情を子供に問い，11 行目で少女が悲しい理由についても深掘りしていることがわかる．このような登場人物の感情をめぐる子供とのやりとりの増加から，感情表現への言及も親子の読み聞かせ時の方が多くなる傾向があると考えられる．

例3-1: 親の朗読
1　MOT: So it looks like she found the owner who lost this dog. The dog's licking the little boy's face. They
2　both look happy and she's watching sadly. So he walks home, appears very dejected, staring at the
3　sidewalk as she walks, and we can see a picture of a dog looking at her.

例3-2: 親子での読み聞かせ（子の年齢=7;1)
1　MOT: What do you think is happening here?
2　CHI2: She's returning him.
3　MOT: You think that is the person whose dog that is?
4　CHI2: Yeah. He looks so happy.
5　MOT: Yeah, he looks pretty happy too.
6　CHI2: Yeah.
7　MOT: How do you think the girl is feeling?
8　CHI2: Sad that she wouldn't have a dog.(中略)
9　MOT: She looks sad? All right. Here she is walking home. CHI1 how do you think she feels?
10　CHI1: Sad.

11 MOT: Why do you think so?
12 CHI1: Because she doesn't have a dog.
13 MOT: Because she doesn't have a dog?
14 CHI1: Mm.
15 MOT: So she's walking. She's kind of got her head down. That makes me think she looks sad.

3. 考察と結論

本稿では，アメリカ人の親子22組と日本人の親子20組を対象に，親が単独朗読を行なっている時と絵本の読み聞かせを行なっている時に，絵本の登場人物の感情をどのように表現しているかについて混合分析を行った．アメリカ人のデータの方では3-5歳にかけて親の感情への言及がピークとなり，8歳にかけて緩やかに減ることがわかった．ではなぜ3歳から5歳にかけてピークに達するのか．一つ理由として考えられるのは，3-5歳になると他者の置かれている状況の感情の結びつきを理解できるようになるという発達上のマイルストーンの影響である．(Hoffman, 2009)によれば，子供は3歳になるまでに自分と他者の感情の区別がつくようになるが，まだイマ・ココにない人の感情については理解ができない．ところが，5歳にかけて子供は架空の人物の感情や彼らの置かれている状況についても想像することができるようになるため，絵本の内容の理解度が格段に上がる．このような子供の発達に合わせた足場掛けをすべく，3歳から段階的に感情表現への言及を増やし，5歳以降はそのような足場掛けを必要としなくなるため緩やかに減少させていることが考えられる．またその際には基本感情（特に悲しみ，喜び）への言及を増やすことで登場人物の基本的な感情を噛み砕き，それぞれの視点からの感情の理解，及びそれとの共感を質問を通して促すという方略が取られることが多いことがわかった．このような丁寧な足場掛けの実施により，親の単独朗読と親子での読み聞かせの際の感情表現の使用頻度に乖離ができると考えられる．一方で，日本人の被験者については3-5歳に照準を合わせて段階的に感情表現を用いるというより，幼少期から豊富な感情表現に浸潤させていると考えれる(Ozaki, 2023)．よって4歳台までは感情表現の使用頻度に増加が見られるものの，早めにピークアウトして足場掛けを減らしてる．感情表現について特別に子供とやりとりを増やしたり，噛み砕いて説明することがアメリカ人被験者と比べると少ないため，単独朗読と親子での読み聞かせでは感情表現の使用頻度に差が見られないと考えられる．これらの結果から，アメリカ人被験者は発達段階対応型の読み聞かせスタイルで，日本人は被験者は浸潤型の読み聞かせスタイルであることが示唆された．

参考文献

Aram, D., & Aviram, S. (2009). Mothers' Storybook Reading and Kindergartners' Socioemotional and Literacy Development. *Reading Psychology*, *30*(2), 175-194.

Blewitt, P., Rump, K. M., Shealy, S. E., & Cook, S. A. (2009). Shared book reading: When and how questions affect young children's word learning. *Journal of Educational Psychology*, *101*(2), 294-304.

Ekman, P. (1992). An argument for basic emotions. *Cognition and Emotion*, *6*(3-4), 169-200.

Hindman, A. H., Skibbe, L. E., & Foster, T. D. (2013). Exploring the variety of parental talk during shared book reading and its contributions to preschool language and literacy: evidence from the Early Childhood Longitudinal Study-Birth Cohort. *Reading and Writing*, *27*(2), 287-313.

Hoffman, D. M. (2009). How (not) to feel: culture and the politics of emotion in the American parenting advice literature. *Discourse: Studies in the Cultural Politics of Education*, *30*(1), 15-31.

Ninio, A. (1983). Joint Book Reading as a Multiple Vocabulary Acquisition Device. *Developmental Psychology*, *19*(3), 445-451.

Ozaki, M. W. (2023). Parental Enactment During Shared Book Reading in Japan. *The Japanese journal of language in society*, *26*(1), 181-196.